詩余ものがたり 北宋篇(一)

—清・葉申薊『本事詞』—

十四、太尉夫人

仁宗のとき、皇族の太尉の妻が、ある日朝廷に上がり、何度もお辞儀をして帝にこう申し上げました。「私には夫があるのですが、不幸にも下女に惑わされております。」帝はお怒りになり、その下女を千里の彼方に流罪となさいました。夫人も罪を問われ、瑤華宮に閉じ込められました。大尉は俸禄を取り上げられて、帝にお目通りすることもできなくなりました。その後、歳月が経ち、春の夕暮れどき、夫人は〔極相思〕と名づけた詞を作りました。

柳は露をたなびかせて、雨があがってようやく晴れた。

花の露は金の茎を隅々まで濡らす。

ふらんこのある庭では、

海棠の花がだんだんとしぼみ、

いまでも清明を過ぎるころ。

玉のように美しいやわらかな腕に、美しいあごを乗せ、おしろいを塗るのは、
いったい誰のため。

流し目がほころびるとき、

あなたを慕って涙がほとばしるのに、

天はこの深い思いの邪魔をする。

この詞が評判になり、帝は許すようお命じになりました。

十五、晏殊・張先

晏殊が都の長官をしていたころ、張先を召しだして判官としました。晏殊は、ちょうど新しい歌姫を納れて、大変彼女を寵愛しておりました。張先が来るたびに、彼女を出して酒を勧めさせ、そのたびに張先の詞を歌わせるのを楽しみにしておりました。(けれども)息子の妻の王氏は許さず、この歌姫を去らせました。後日、張先がやってきて、一緒に酒を飲みますと、張先は〔碧牡丹〕詞を作り、宮妓にこれを歌わせました。それはこのようなものでした。

かくし布 ゆれる紅の薄絹。

朝方の月は墮ち、朝靄が重なる。

緩やかな拍子を打つのは梅檀、

伊州の新曲を歌い終わる。

松尾肇子

怨みは眉に入り、
墨を引いたみどりの眉を寄せる。

芭蕉に寒々と、

「雨音が落ちて弾ける。」

鏡はかけり、

一羽の鸞が戯れるのをひっそりと照らしている。

思えば去らせる時はあっさりとしたもの。

(愛を誓った)飾り小箱もかんざしも、

今となつては粗末に扱われ軽々しく棄てられてしまった。

(待ち合わせの約束をした)藍橋を遠くから眺めれば、

暮雲が千里彼方に続くばかり。

幾重の山、幾重の川(が隔てている)。

晏殊は慨然として言いました。「人生は楽しまなければならぬものを。どうしてこんな苦しまなければならぬのか。」すぐさま家の者に命じて金を払わせ、歌姫を取り戻しました。歌姫が戻ってくると、王夫人ももう何も言いませんでした。

十六、宋祁そうき

ある日、宋祁が都の繁台街を通った時、後宮の数台の車に会い、避けることができませんでした。すると突然、車の簾を揚げて「弟の宋さんだわ」と言う人がいました。これを聞いた宋祁は大変驚き不思議に思い、家へ帰って「鷓鴣天」を作りました。

美しく飾った立派な車と町の狭い通りで行き会った。

綺麗な縫い取りの簾の中から聞こえた君の一声が腸を断ち切るは

詩余ものがたり 北宋篇(一)

どに私を苦しめる。

翼を並べて空を飛ぶ美しい鳳凰の羽を持ち合わせていないが、私たちの心には神秘的な犀の角にはしる一筋のように(妨げを越えてお互いに)通じ合うものがある。

(君が住むのは)金で飾った部屋、

玉で作った窓。

車は流れる川の水のように、馬は竜のよう。

劉晨は(仙女たちの住む)蓬萊山に戻れなかったが、

(私達は)蓬萊山への道のりを幾万も重ねた遠さにもっと隔てられていて。

宋祁の詞は朝廷にまで伝わって、仁宗がお知りになり、そこで第何番目の車の誰が「宋さん」と呼んだのかをおたずねになりました。するとある女官が自ら「さきごろ宮中の宴会が開かれたおりに、翰林学士が召しだされ、左右の内臣たちがみな『弟の宋さん』と呼んでおりました。あの時車の中にいて偶然にお見かけしたので、一声呼んだまですぐに話して述べた。仁宗は宋祁を宮殿を召して、ゆったりとこのことに話し及ばれたので、宋祁は恐れつつしんでいたたまれなかつた。仁宗は笑って「蓬萊山は遠くないぞ」とおっしゃって、ただちにその女官をお与えになった。

十七、孫洙そんしゅ

孫洙は字を巨源きよげんといい、元豊年間、翰林学士となり、李端願りたんげん太尉と最も親密に交際していました。ある日(詔勅を起草するために)翰林院の門を閉ざすので、お召しの役人が家に来て、数十人を使つて行方を追い、李氏の家でつかまえました。そのとき、李氏は琵琶が

上手な新しい歌姫を家に納れたところでした。孫洙は酒を飲んでいて行こうとしないのを役人に促がされ、翰林院に入ったのは夜遅く二更に近くなりました。三通書き終わっても、まだ思いを忘れることができず、筆を走らせて〔菩薩蛮〕を作りました。

楼の上ではまだ三更の鼓をたいている。

どうして死ぬほど人をせかして連れて行く必要があったのだろうか。

馬にまたがるのは大変慌しく、

琵琶の曲もまだ終わっていなかった。

振り返って遠く目をこらすとき。

細かい雨がさらさらと降っていればなおさら。

玉で堂を作るなどと言っても無駄なこと、

玉堂(と呼ばれる翰林院)で今夜は長い。

夜が明けると、すぐに馬を走らせてこれを李氏に見せました。

十八、劉几

劉几は字を伯寿はくしゅうといい、以前から楽律に詳しく、神宗の御代には、范鎮はんちんと宮中の大楽の改訂に携わりました。熙寧年間に秘書監の地位で職を退きました。洛陽のボタンの品評で「状元紅」は時の栄冠に輝きました。楽工の范日新はんじしんは作曲することができ、都の汴京ペックイの歌姫郃懿はくいは美人で有名でした。ある春の夕暮れ、牡丹がちょうど満開で、劉几は范日新と郃懿とを連れて花を愛でつつ楽しく酒を飲み、「花発状元紅慢」を作ったことを記しました。

うつり来た春も終わろうとし、草木は茂ってかげを作り、美しい花が開こうとしている。

あでやかな姿はなよやか。

並み居る中に冠たる、

一国一城すら危うくするその美しさをともに愛でよう。

宮中の庭園も晴れた昼は暖かく、

たくさんの白や紅の花々はひとときわ素晴らしい。

美しい敷物を開けば、

歌詠みの名手が集い、

元稹・白居易をも圧倒した。

ほかにここにも一輪の花がほのかに小さく、

華やかな縫い取りの幕、

さらびやかな屋根を載せ壁を飾った車の中に居る。

紫のオシドリ、白い蝶と一緒に。

すがすがしい朝からしばしば夕暮れまで。

ウグイスが笛の音のように声をこころがし、

愛らしいツバメが美しい梁で語らって人の足を止めさせる。

桃源郷を訪ねた人は、

夢魂を引かれ思いは濃く、

情におぼれてもかまわないと思う。

郃懿は六番目であったことから、当時の人々はみな郃六と呼びました。郃懿は蔡奴さいにょという娘を生み、彼女も美貌と芸とで有名でした。李定りていも彼女の子で、定は母が亡くなって喪に服さなかったと非難されましたが、母は実は郃六なのです。

十九、韓續かんじゆ

韓續には寵愛している歌姫がおり、詞が上手でした。韓氏が北へ使者として赴いたとき、彼女は「蝶恋花」を作って贈りました。

(花の) 香りは風と光となって、露に濃く染みこみ、

二匹の蝶は一緒にいたのに、

またも別々に飛び立たされてしまった。

こっそりと春の神に訴えてもきっとお許しにならないだろう。

涙が私の心を濡らして流れる。

神宗はこのことをお知りになり、特別に歩軍司にお命じになり(彼女に)家移して韓氏を途中まで送らせました。その時はなぜこの詔が下されたのか分からず、後になってようやくこの別れの曲が宮中まで伝わったためだと分かりました。韓氏にも「芳草」の詞がありました。

別れの愁いを閉じこめても、

どこまでも続いて果てしなく、

来たときには道によく香るくらいだった。

刺繍を施した帳の中の人は、遠い旅路を思い、

ひそかに真珠の涙を流し、

声をしのばせて泣きながら旅立つ車を見送った。

長い旅路の間(かぐわしい草を)いつも目にするのに、

さらに(見えるのは)幾重にも重なって

流れる川のほとりにぼつんとある村。

ただ眺めやる楼閣は高く、

一日中あの人を捜し求める。

詩余ものがたり 北宋篇(一)

魂も消えそう。

池のほとりで別れてからというもの、

かつて(二人で)歩いたとき、

緑の草は軽やかなスカートを羨んだものだった。

あのときには白い手をとって、

乱れ飛ぶ花と舞う柳の絮わたの中、

ゆっくりとかぐわしいしとねの上を歩いた。

若々しかった顔がなすすべもなく老いるのに、

毎年毎年、

かぐわしい草はいつも新たに(生い茂る)。

(本当は)緑の野原で、楽しく遊び酔い、

若い時を無駄にしてはならない(のに)。

二十、呉感ごかん

呉感、字は応之おうしは、天聖年間の省試で首席となり、文章によって有名でした。紅梅こうばいという寵愛している歌姫がおり、彼女の名前を建物に付けました。そこで「折紅梅」の詞を作りました。

見れば南へと渡って行く雁、

疎らな林の落葉は、

霜にしぼみ乱れ落ちる。

ただ紅梅だけが年末の寒さの中、

最後に花びらをほころばせる。

まんまんとした水のほとり。

花の疎らな枝の影が横に伸びて清く浅い水面に映っている。

造化の神は、

深い燕支色を取り、

(白く美しい) 姑射山の仙人をとがめて、
紅をお与えになったようだ。

誰が愛でるのか。

金の掛け金が開くまで待ちながら、

欄干にもたれかかってまずは見てみる。

昔、寿陽公主の白い額に舞い落ち、

梅花粧となって漢の宮殿にひろまった。

江南の風は暖かい。

春の便りの一つ枝の清らかな香りが遠くまで届くの喜び。

お酒に向かえばまさに好い、

素晴らしい花を折り取り、

清らかな香りを擦って幾度も嗅ぎ、

杯を挙げて重ねて酒を勧める。

二十一、欧陽修(其の一)

欧陽修が河南府の幕職だったとき、一人の妓女をひいきにしていた。錢惟演が(上役の)西京留守の任にあり、梅堯臣・尹洙ともに配下にいました。ある日、後ろにある庭で宴会が開かれ、客が集まったのに、欧陽修と妓女のふたりは来ませんでした。しばらくしてやっと来ましたので、錢氏は妓女を、どうして遅れたのかと問い詰めました。妓女は「暑さにあたってたので、涼しい部屋行ってちよつと休んでおりました。目が覚めてみると金のかんざしが無くなっていて、とうとう見つけれませんでした。そういうわけで来るのが遅くなったのでございます。」と謝りました。錢氏は笑って「欧陽推官の詞を得られたならば、かんざしを埋め合わせてやろう。」と言いました。

欧陽修はたちどころに〔臨江仙〕を作りました。

柳の向こうに雷がなり池には雨、

雨音が滴って蓮に碎ける音をたてる。

小さな楼台の西の角には とぎれた虹が明るくかかる。

欄干にこっそり寄りかかれれば、

待っていた月が射してきた。

ツバメが飛んで来て美しい梁から窺っている。

玉のかぎに簾が垂れ下がる。

波ひとつたてずたかむしろの模様は平らか。

水晶のふたつの枕

かたわらに落ちたかんざしが横たわっている。

宴席に連なっていた人々は膝を打って感嘆しました。錢氏は妓女に命じて欧陽修に酒で満たした杯を勧め、公金でかんざしをつぐなってやりました。

二十二、欧陽修(其の二)

去年の元宵の夜、華やかな街の灯は昼のようだった。

月が柳の梢に射しのぼり、あの人は黄昏の後に(会おう)と約束した。

今年の元宵の夜、灯も月も昔のまま。

去年のあの人に会うこともなく、涙が春の衣の袖に満ちる。

これは欧陽修の詞です。世間では朱秋娘の詞だと言い、彼女は徳を

失った女性だと疑われているので、彼女のために疑いを正しました。
秋娘の名は希真きしんといい、朱敦儒しゅとんじゆの字あざなとまったく同じです。

二十三、張先ちやうせん

張先は雅やかでしゃれており、とりわけ詞にすぐれていて、宴席で
妓女に贈った作品がたいへん多い。その中で、誰に贈ったかを明らか
にできるものには次のようながあります。

〔謝池春慢〕は謝媚卿しやへいりやうのための作品です。詞はこうです。

めぐり続く垣根 深い奥庭、

時に鳴きながら飛ぶウグイス。

寒さを覚えて刺繍をほどこした掛布団をひきよせ、

美しい楼閣に夜明けが訪れる。

朱い欄干は空に連なって、

飛び交う柳絮は数え切れない。

小道にハマスゲがひろがり、池の水面がひろがっている。

日は長く風も静かで、

花影がひっそりと照らされている。

花の香りの塵をたてて馬を馳せ

謝娘に会ったのは町の南の道。

ひととき華麗しく、おしろいをはたいて、

あでやかに微笑する。

とりどりの色も鮮やかな衣は薄く、

薄い玉の二匹の蟬の髪飾りがかわいい。

よろこびには逢いがたく、

春は行ってしまふ。

詩余ものがたり 北宋篇 (一)

琵琶の音色は、
すべて相思のしらべを込めている。

また〔南郷子〕は、二人の玉（の字のつく妓女）が胡琴を演奏するの
を聞いたときのものです。詞はこうです。

二人並んだ柳腰。

はやりの化粧はともに最新。

首の曲がった胡琴の魚尾はかき鳴らす、

ひとりぼっちの人の思い。

「入塞（異国に嫁ぐ）」を奏でる絃の音色を水のほとりで聞く。

空の青がスカーフをそめる。

しっとり赤い軽やかなうすぎぬのひだのスカート。

花々が随うものだから霜雪の女神は嫉妬する、

春の神に。

こっそりと二輪の花をおりとして小さな春を借りるとしよう。

また〔望江南〕は、龍靚りゆうせうに贈ったもので、その詞はこうです。

青楼の宴で、

靚さんが銀の杯を勧めてくれた。

ひとかたまりの白い雲に川にのぼった月が満ち、

天のきわに練り絹をひろげたよう 夜の潮が満ちてくる。

彼女は（仙女が住む）瑤台ようたいと間違えたのだろう。

こちよく酔い、

両頬に赤みが差す。

詩余ものがたり 北宋篇(一)

美しい顔は薄紅の粉をつけたのではなく、
香る紅は雪が梅を閉じ込めたのにずっと勝る。
その気品は世俗の外。

ほかに十二歳の琵琶を弾く娘に贈った〔酔垂鞭〕があつて、その詞は
こうです。

お化粧はしていない。

花の枝は小さい。

春は思いのほか好い。

なよなよとして衣裳の重みに堪えているよう。

薄絹には赤い霧がかかっている。

琵琶には金で鳳が描かれている。

二本のひもは重い。

ものうげな眉は下を向く。

啄木鳥の(ような)かすかな音がゆっくり響く。

黄蜂が花のあたりを飛び回る(よう)。

また九人で胡琴を演奏するのを聴いて、〔定西番〕を作りました。

金のばち 紫檀の胴 金襴の布、

ふたつの花の萼、

二羽の舞う鸞。

いずれも漢の後宮のいでたちで、

美しさを競う。

三十六本の絃がにぎやかにはじかれ、

こまかな響きは 蜂が群れているよう。
王昭君の恨みは聴きつくした、
かさねて演奏してくれるな。

また舟で二人の妓女の琵琶を聞いた時には、〔剪牡丹〕の次のような
のがあります。

野の緑は空に連なり、

空の青は水に落ち、

白い(その水)はゆらゆらとして清らかだ。

柔らかな柳の枝はさやさやと揺れて、

落ちていく絮は影も無い。

みぎわに日は落ち 帰る人は、

長いスカーフ 薄いたもと、

競い合つて香草を摘み翠の羽を拾う。

波を踏むかのよう、

もやのかかる渚の春の宵に。

五色のひも 朱いなわ 新たに整えなおした。

刺繍の屏風(の前)、美しい船にとどまれば風もやんだ。

金の鳳がふたつの琵琶にうたう、

その音色に込められた古今の深い思いを(私を置いて)誰がわか
るだろう。

玉の大皿に乱れ落ちる大小の真珠(のような音のつぶ)がほとば
しる。

(先に飲んだ)酒気が化粧した顔にのぼってきて、

花のようなあでやかさで並んでいる。

重ねて聞く。

漢の王昭君わかしよくわんの一曲を弾き終わると、
川も月もひっそりと静まる。

そして笛を吹くのを詠み、舞を詠み、歌の上手に贈った作などは、枚
挙にいとまがないのです。